

枕草子鑑賞

——皇后定子の子生よりみる—— (一)

九七段・百段・一七九段・二六二段

山 本 和 子

この原稿は、昭和四十六年度大阪国文談話会主催の円珠庵土曜講座で、枕草子がとりあげられ、その十一月の講座担当をさせていただいたのが契機となり、その時お話ししました内容を中心に、これに若干日頃の考えをも附与して論文形式にまとめたものです。講座では、^{註(1)}九七段「御かたがた君達」、六段「大進生昌が家に」及び七段「上にさぶろふ御猫は」の三段でありましたので、当初は、この三段を使つて定子の生涯を物語り風に書き上げようと思つて始めたのですが、いざ書き出すと紙数や区切の無理で、完成はもつての外、九七段をもつて一区切りとせざるを得ませんでした。そこでこの九七段に、^{註(2)}百段・一七九段・二六二段をも関連的に附加言及し、定子の生涯の前半の概容を窺いうるようにと心がけました。

さて、枕草子九七段以下の講義を始めるに当って、この草子を、なるべくわかりよく面白く解釈鑑賞したいための方法として、どのような視点をもてばよろしいでしょうか。鑑賞の機軸に何を持てばよいのか、本当に深い興味に基づく視点をその作品に持ち得ているか否かは、作品理解の深淺度、或は古典の現代的意義の評価に

さえ影響してくる大切な問題ですが、この点、今迄幾多の秀れた論文が出されているにも拘らず、今後とも私共のお各人が考えてみねばならない課題であると思われるのです。

それじゃあ、私達はどんな視点から枕草子に入りこむとよからうかということですが、そこで私は試みに、今迄の多くの研究者がとつてきている清少を中心に置いて、枕草子を論ずるというやり方ではなく、清少を包含している所の一条帝皇后定子の波乱万丈かつ薄幸の生涯を物語りの中心に据え乍ら、本稿でとりあげた諸段をも含むところの史実録的段々が、どのような時期に該当するか、史実をも見つめた目で枕草子を見直した時、どのようにそれらの段々が解されてくるか、を在来よりも詳しく見ていってはどうかと考えます。

枕草子に対する色々な評価や批評が出ておりますが、皆様はそれらの評言に比してどのように自分なりの感想をお持ちになるか、元来、永らくの間、我々の頭の中には枕の草子即ち随筆文学の雄たる

ものとの定評を冠されたままに、頭の中に整頓されてきてまいりました。が考えるに枕草子の古典としての価値はこのような面のみに限るのではない。むしろ、門外漢の我々ではありますが、この際それ故にこの立場を逆用して、歴史的評価というものゝ重みに引きづられず、自由な見方で、各自にとって各々最もこの作品が魅力的に見える一観的を軸にして味読してみてはどうかと考えます。

私が、この枕草子を読んだ当初に受けた実感をここで白状いたしますと、当時高校の教科書では、序文の「春は曙、やうやう白くなり行く山ぎはすこしあかりて云々」の序段が掲載され、そうしてこれを読む限りにおいて、その頭の回転の早い、歯切れのよい絵画的場面を連鎖的に有する文章の音楽的な響きに魅せられ、特に「日入りはてて風の音むしの音などほたいふべきにあらず」という春から秋迄の描写がよかった。だから、このような調子で続くものという予想をもって読み始めたところが全く違う。アランの人生論やモンテーニュのエッセイなどを読んだ目でこの文を読むと、最後には必ずずといてよい程、寝入ってしまうといった調子でありました。だからといって源氏物語はよいかということもまたさにあらずで、帚木の巻の女性論をよんでも、陳腐な感を抱いたに過ぎませんでした。まあ、私ほどひどくなくても、これに似たような思いを皆様方の中にもお持ちになられた方もおありかと存じます。ですから、そこでどうすれば、現代の我々がこの枕草子という古典を興味深く読み進め得るか、改めて鑑賞や解釈や研究なりの方法を、批判し、考えてみる必要があるのです。今迄に、枕草子の注釈書や解釈

書が実に数多く出されているのですが、まだまだ、無味乾燥な表面的な語釈や解釈或は評論にとどまったまゝになっており、この点、以後もっと史実その他の究明から入った、生きた解釈や鑑賞が強調されてよいと考えます。

大体、文学作品への関心というものは、特に職業としてこれを専攻しようという意識で最初から入った人は別として、そうでない殆んどの人が、文学や古典を知ろうと云う気になった最も大きい契機は、所謂訓詁注釈や考証への興味からでなく、現在の人生や現代の人間生活に、何らかの示唆や慰め、生き抜きや励ましや刺戟を与えられ、それによって私達の思考感情様式や行動に、或変化や改良を施こして行こうと云う、意識的無意識的要求に基づいている場合が多いようです。この事実を、私達をもっと古典の解釈の上でも大切にしてゆきたいと思うのです。それから、もう一つ、現代、数多くの大学の文科系の各科目に、女性の数が非常に多くなってきております。この現状を目前に見て思う事は、女性というもののは一般に男性に比して、特に将来家庭などに入ると行なう用事が雑多で、その中で持ち得るのは、長く纏った時間ではなく、中断されコマ切れになった短い時間の連続であって、その中でしか物を考えられない場合が多い実情であります。そういった女性が古典に親近感をもって向えるためには、内部から心を動かされるような視点や観点を、鑑賞の機軸として保持し、そこから放射的に放たれた興味や関心や探求心を発展させてゆくというやり方を採らない限り、持続的な興味を古典作品に対してもってゆくことは、仲々困難なことであらう

と 생각합니다。

ここに、或時期において或古典に対する評価が落ち着いたとします。が、古典の価値や鑑賞態度というものは、以後その落ち着いた評価の枠内で見ざるべきものと定められたものではなく、よりその古典に親しみ、深く味わえるような方法なりテーマを、各自で勇敢に開拓してゆく試みも必要で、そうすることが、微の中に埋もれかけた古典を現代に再生させることにもなるのであって、出来るだけ、古典作品のもつ内容を、多角的な面から考え活用するに越したことはありません。

では翻って、枕の草子を実際に講義するに、右に述べてきたような条件をより満足させるには、どんな観点を選らばよいのか、ここに至って、私は、前述したごとく一条帝中宮のちに皇后になった定子の生涯というものを中軸において、枕草子を見てゆくというやり方をお奨めしてみたく思うのであります。

御存知の方もありませんが、枕草子を書くことを思い立った契機として、清少の仕えた定子の存在をぬきにすることは出来ません。しかも、この定子の生涯は、中関白家の盛衰と道長の抬頭という一大政權の交替期に挟まれた犠牲者として、一篇の小説を地でゆく、ドラマチックなものであります。彼女の歴史を辿る時、千年という時代の差を越え、それが史実であるだけに、それを読む者が女性であり、子を持つ母であるならば一層、彼女の運命的ともいえる悲運につまされて、心から泣き、同情の念で一杯になり、彼女と共に浮び出る人物、例えば、夫の一条帝、一条帝の生母詮子、道隆、

道兼、道長、伊周、高階氏一族等々の群像の中にみる人心の趨起性に撫然となり、更に、不平も多いつましい自分の生活なり、或は現在かく生き得てこられている事に、幸せをすら感じてしまうのです。そうして私は、こうした定子や定子を囲繞する人々の人間像や運命への史的興味の故に、つまり今迄の殆どの枕草子研究者がとってきた清少納言中心の入り方とは逆に、定子や定子を囲繞するこういった人々の人間像なり、その背景をなす時代への史的興味の故に、彼女と運命を共にした清少納言の人間像——作品へと、更に現代人にとっては幽明の彼方に沈んでいる一条朝前後の後宮やそれらもつサロンの雰囲気を知るために、或は名を知るのみで全く血肉を附されたこともなかった上達人等の面貌を、少しでも鮮明にさせたために、等々と多くの興味を派生させ、枕草子に回帰するような鑑賞方法の採用を強調したいと思うわけであります。

九七段

〔口訳〕中宮定子の御前には御かたがた「お身内の女の方々、貴公子がた殿上人などが大変多くお控えになっておられましたので廂の柱によりかかって、中宮にお仕えする同僚の女房と物語などをしていましたところ、中宮が何か物を投げておよこしになりましたので、開けてみますと、「思ふべしや、いなや。人、第一ならずはいかに」、「あなたを愛した方がいいのですか、それともしない方がいいのですか。人が、あなたを第一に愛するといふのではない場合には、」とお書きになっておられました。御前

で物語などをするついでにも、「すべて、人に第一に思われなくては何になりましょう。そうでないくらいなら、かえってもう大層憎くまれ、悪くあしらわれた方がましです。二番目や三番目に、なんていうのは死んでも嫌です。第一番目でありたいわ。」など、というとき、「法華經（方便品）にある一乗の法のようにですね」などと、人々の笑い種になっているようです。

筆や紙などをおよこしになられたので、「九品蓮台の間には、下品といふとも」などと書いてさし上げますと、「無下に譲歩してしまいましたね。いけませんわ。一度断言したことは、そのまま言い通せばよいのに。（途中で変えたりしないで）」と仰言います。「でも、それは、相手の人にも依るものでございます」と、申し上げると、「それがいけないのですよ。第一の人に第一番に思われようとこそ思うものです」と仰せになられるのも、おもしろい。

こういった会話が、中宮定子と清少納言の間に交わされたのは、定子や清少の生涯の何時頃のことなものでありましようか。この九七段の年時に関しては、池田亀鑑氏の「全講枕草子」の九七段〔要説〕中で「回想の記、事実の年時は明らかでないが、恐らくまだ中の関白家の権勢が盛であったころ、すなはち、長徳元年（995）四月道隆が薨去する以前のことを回想したものと思われる。」とあり、池田亀鑑・岸上慎二校注の岩波古典大系本「枕草子」の補注八六にも、この推定に誤りはないであろうと書かれ、後掲の年表中にも長

徳元年の条に四月以前として掲載されております。即ち、この文中に描かれた中宮や清少納言像には、若々しく暗い影がないという点から考えて、定子の父道隆が四三才で死ぬ西暦995長徳元年四月以前の事を回想して書いたものと推測されておられます。が、しかし、ではどういった点に、若々しく暗い影が感じられないと感ずるのか、ということになりますと、具体的な説明がなされておりませんので、この点を自分なりに補説してみたいと思います。

結論から先きに述べますと、この道隆薨去の長徳元年四月以前というごくおおまかな年時を、他の一七九段（一一八四段）と二六二段（二二七八段）らと関連して考えて、初宮仕えを正暦四年の初冬とした時、内容年時を少なくとも翌正暦五年（994）中の事と両氏の説をもう少し溯って考えてもよいのではなからうか、と感じております。

即ち、定子が清少に対して、この九七段中「思ふべしや否や」と発している質問と同類の言葉が、いづれも枕草子の記述年時の判明出来得ている段文中、清少の初宮仕えの時期に最も近い一九七段と二六二段の文中に、同じく定子によって清少に向けて発されているのを見ます。

これを具体的にみる前に、まず清少の初宮仕えの時期は何時だったろうか、との設問にも私なりに答えておく必要があるでしょう。古来ある諸説を、ここに表示して眺めてみますと、

（一）九九〇正暦元年か二年の冬説（以下の文、敬称省略）

山岸徳平「校註枕草子」・塩田良平「日本古典読本枕草子」

(一) (九九二) 正暦二年

冬説

前田家本小白河の冊「みやにはじめて云々」の傍註・金子

元臣「枕草子評釈」大13

冬又は正暦三年二月説梅沢和軒「清少納言と枕草子」明

45 春説

市川寛「道長をめぐる人々」国語国文 昭8

(二) (九九二) 正暦三年

五十風力「早稲田大学文学講義 枕の草子評釈」・小沢正

夫「枕草子成立時期についての考察」・永井一孝「枕草紙

新釈」・鳥野幸次「雄山閣国語国文学講座第一巻」

二月説

有馬賢頼「枕草子の研究」国語国文の研究 昭3・12

冬説

武藤元信「枕草子通釈」明44

(四) (九九三) 正暦四年

初春説

田中重太郎「枕冊子研究」「清少納言宮仕年代考上・下」

歴史と国文学 昭17・10・11 柿谷雄三「清少納言の生

涯」解釈と鑑賞 昭39・11

二月説

岡一男「源氏物語の基礎的研究」

冬説

坂元三郎「清少納言の宮中奉仕年代」東亜之光 明41・7
岸上慎二「清少納言伝記考」「清少納言の初宮仕の年代に
ついて」国語 昭11・7 池田亀鑑「全講枕草子」

以上の如くであります、その推測手がかりである一七八段中の
記事に窺える 1 雪の降る厳寒 2 或いは初春らしき感(「浅緑な
る薄様にえんなる文」の語句に) 3 伊周の大納言在任中(正暦三
年八月廿八日に権大納言に任ぜられ、その権大納のまゝで二年経過
して一挙に、正暦五年八月廿八日に内大臣となる)である 4 服装
の点から円融院の諒闇中(正暦二年二月一日崩御より同三年二月
一日周忌)ではないという諸条件に叶った時期であることです。
柿谷雄三氏は前掲「清少納言の生涯」父祖・家庭・結婚・宮仕・主
家・晩年」中において更らに、「うすさこさそれにもよらぬは
なゆゑに」の句に春らしい感じがすること」を加えられて、これと
2の春らしさを重視する時、初春説が有力になり、正暦五年二月の
積善寺経供養を記する二六二段に、新参らしく思われる点を重視す
る時、冬説となろうが、「筆者はあくまで初宮仕の段(一一七九
段)に描かれている事を重く見なければならぬとする立場から、
春説に左袒したい」と述べておられるのであります。が氏のあげら
れた「うすさこさそれにもよらぬ花(鼻、くしゃみをかける)云
々」の歌に、前掲「浅緑なる薄様」という語句と共に、初春らしさ
を感受でき得たとしましても、そこから、初宮仕え正暦四年初春説
をわたりだすには、以下のような点から、なお危懼を感じます。

「薄さ濃さ、それによらぬ花」とあるわけですが、では、「薄さ

濃さによる花」とは何か。勿論、桜ではなく、梅花、就中、紅梅のことをさすのではないでしょうか。枕の草子中にも「木の花は、濃きも薄きも紅梅」と三五段においては木の花の筆頭として書き出されておき、或は、紅梅襲と云う十一月から二月にかけて着用される色目として、「紅梅いとあまた濃く薄くて」・「紅梅の濃き薄き織物」(二六二段)等の表現が随所に散見いたしております。又、梅花そのものは、勅選集などでも春・上の部、即ち一二月の所謂初春に詠ぜられている事が多いのですが、冬の部にも古今集などでは詠ぜられておりますから、一概にそれ故春期のももの言い切りも出来まいかと思ひます。それに、この歌を詠じたその時点が初宮仕えの頃に近い、と言うだけで、初宮仕えを早春に決定せしめる論拠ともなりえないように思われます。その上に、以下に掲げるところの、正暦四年正月——三月末迄の一連の史実、及び枕草子百段・二六二段中の記述らに関連して考察した場合、不都合が感じられてしまうのです。即ち、

(1) 正暦四年正月廿二日

「辛刻、今日有内宴、未時許参内著青色調服 餽鯛魚袋等、仁寿殿御装束如常……藏人右少将明理出陣召公卿、内大臣以下、近衛次将(雅信)親明理……其程公卿難畫立、在列只十一人而已……左大臣……依腰下有所劣、令奏事由、不進列謝座……謝酒了、……然後公卿次第参上著座、次々将参上左少将隆家 昇上著座……次内記参上、先是典侍候陪膳……左大臣起陣座参上、次撰政……参上……大納言伊周……

(2) 東三条院、中宮(皇子)為見物、御承香殿(皇子)「(小右記) 二月廿二日

「冷泉院第四敦道親王、於東三条南院元服……中略 又撰政第三姫君、於同院西对著裳」(「日本紀略」)

「今夜冷泉院四親王加元服、撰政二三四娘著裳、南院云々」

廿三日辛巳早朝(公任)藤宰相被示送昨日案内、於東对有親王御元服儀、……中略於寝殿有著裳事、御元服事了、公卿向寝殿實子、有管絃……中略於对有御元服事、於寝殿有著裳、誠可驚怪事也以下略」(「小右記」)

東三条南院東対で冷泉院第四皇子敦道親王が元服の式を挙げ、同時に、同院の寝殿(紀略によると西の対)で、道隆の二女原子を始め三女、四女の三女兄弟(紀略によると三女のみ)が裳儀の式を挙行している。

(3) 三月廿七日

「撰政二娘今夜入内、或云、参中宮、為見明後日賭弓、又云、為備御所参入云々、后宮定有思給歟」(「小右記」)

参考 長徳元年「正月十九日、丙寅、関白二娘(皇子)、今夜参

青宮」(「小右記」)

「正月十九日、丙寅今夜関白第二女参東宮」(「日本紀略」)

道隆の次女原子が内裏に入られたが、これは、中宮の許にいったので、明後日の賭弓を共に観るためだとも、或は御所に(女御として)参られる下準備のためだともいわれ、定子に何か思

う所あるようである。

三月廿九日

「……又殊召懸物於后宮」女襲束 后宮坐射殿在南殿西厢后（小右記）
第一也 為見物所參、無由事也

射殿（又は射場殿ともいう）、即ち校書殿の東廂の北二間を射殿というが、こで行われた賭弓を、定子は見物している。

「二月廿八日、丙戌、酉刻主上出御待所、撰政被候、藏人式部丞輔尹、左中弁扶義、右中弁俊賢同候、依仰、各被別前後射手等、藏人式部丞輔尹、執筆書分取了……次前方人々詣左中弁宿所、後方人々詣右中弁宿所……予後方人也

前 隆家朝臣、登朝、宣方朝臣、頼視朝臣、正光朝臣、為任、明順朝臣、経房、正清朝臣、相方朝臣、知章、信順、忠輔、惟時輔尹、脩政、陳政、頼光、道忠、伊章忠家

後 実方、実成、明理、行成、相尹、通任、景育、朝経、憲実、道方、道順、重家、遠相、通経、理美、行義、方隆、理兼、惟能、貞光、忠方三月廿九日、丁巳、賭弓前勝云々」（権記）

三月卅日

戊午、巳時東三条南院弘地焼亡、撰政家」（日本紀略）

「戊午南院焼亡」（権記）

(6) 正暦五年二月

（例文(6)以下の迄は「関白殿、二月廿一日に法興院の積善寺」二六二段（二七八）よりの抜萃文。

「向などいみじく化粧じ給ひて、紅梅の御衣ども、おとらじと

着給へるに、三の御前は、御匣殿・中姫君よりもおほきに見え給ひて、上など聞えむにぞよかめる」

(7)

「……西の対の唐廂にさし寄せてなん乗るべきとて、渡殿へあるかぎり行くほど、まだうひうひしきほどなる今参りなどはつましげなるに、西の対に殿の住ませ給へば、宮もそこにおはしましてまず女房ども車に乗せ給ふを御覧ずとて、御簾のうちに、宮・淑景舎・三四の君・殿の上、その御おと三所、立ち並みおはしまさふ
北の方より

(8)

「上もわたり給へり、御几帳ひき寄せて、あたらしうまゐりたる人々には見え給はねばいふせき心地す」

(9)

「いかなればかうなきかとたづぬばかりまでは見えざりつる」と仰せらるるに、（清少は）ともかくも申さねば、もろともに乗りたる人、「いとわりなしや最果の車に乗りて侍らん人は、いかでか、とくはまゐり侍らん。これも御厨子がいとほしがりて、ゆずりて侍るなり、暗かりつるこそわびしかりつれ」とわぶわぶ啓するに「行事する者のいとあしきなり、また、なかかは、心知らざらん人こそはつつまめ、右衛門などいはいむかし」と仰せらる。

(10)

「御前にゐさせ給ひて、ものなど聞えさせ給ふ。御いらへなどのあらまほしきを、里なる人などには、つかに見せばと見たてまつる。」

(11)

「なほ、（定子の立派きにうたれ）かくしもおしはかりまゐらする人はなくやあらんとぞくちをしき」

- (12) 「殿（定子の父道隆）おはしませば、ねくたれの朝顔も、時ならずや御覧ぜんとひき入る」
- (13) 「車の左右に、大納言殿（定子の兄伊周時に二十一才）・三位の中將（弟隆家時に十六才）二所して簾うちあげ、下簾ひきあげて乗せ給ふ。……「それ、それ（誰、次は誰と）」と呼びたてて乗せ給ふにあゆみ出づる心地ぞまことにあきましう、顕証なりといふも世のつねなう」
- (14) 御簾のうちに、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見ぐるしと御覧せんばかり、さらにわびしきことなし。汗のあゆればつくろひたてたる髪なども、みなあがりやしたらんとおぼゆ。からうじて過ぎ行きたれば、車のもとにはづかしげにきよげなる御さまどもして、（伊周・隆家の）うち笑みて見給ふもうつならず。されど、倒れてそこまでは行きつきぬるぞ、かしこきかおもなきか、思ひたどらるれ」
- (15) さてのちは、髪あしからむ人もかこちべし。あさましういつくしう（莊嚴で）なほいかで、かかる御前に馴れ仕うまつるらんと、わが車もかしこうぞおぼゆる。」
- (16) 大門のもとに高麗・唐土の樂して、獅子・狛犬（こまいぬ）をどり舞ひ、乱声の音、鼓の声にもものおぼえず。こは、生きての仏の国などに来にけるにやあらんと、空に響きあがるやうにおぼゆ。
- (17) 「乗りつる所だに、（あんな風に恥しく）ありつるを、いますこいあかう顯証なるに、つくろひ添へたりつる髪も、唐衣の中に

てふくだみ、あやしうなりたらん、色の黒さ赤さへ見えわかれぬべきほどなるが、いとわびしければふともえ下りず云々」
長徳元年二月
（百段）

(18) 「正月十日にまゐりたまひて御文などはしげうかよへど、まだ御対面はなきを、二月十余日宮の御かたにわたりたまふべき御消息あればつねよりも御しつらひ心ことにみがきつくるひ、女房など皆用意したり、……中略……まだこなたにて御髪などまゐるほど宮『淑景舎は見たてまつりたりや』と問はせたまへば、清『まだ、いかでか。御車よせの日（岩瀬文庫本は、傍点部分「積善寺供養の日」とあり）、ただ御うしろばかりをなむ、はつかに』ときこゆれば、「その柱と屏風とのもとによりて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたまはするに、うれしくゆかしまきりて、いつしかと思ふ。以下略」
以上（一）内は私に補した

さて、右の例文中、まず史実から考えてみましょう。初宮仕え、正暦四年初春説を仮りに採択いたしますと、「正暦四年の初春」の範圍に入ると考えられます所の同年正月／三月末迄の一連の史実を辿ってみますと、まず、

(1)の記事より、正月廿三日には、仁寿殿に於て、定子の夫当時十四才に当られる一条帝と、定子の父で四十一才になった摂政藤原道隆と彼の嫡男で定子の兄に当る二十一才の大納言伊周らを始め左・右・内大臣列席の下に行われた内宴を、定子と、一条帝生母東三条

院詮子が、仁寿殿のすぐ後方の承香殿から見物していることがわかります。(2)に、翌二月廿二日には、道隆の第である東三条南院に於て、同じ日に、同時に、東の対の御殿では、先帝冷泉院と道隆の姉に当る冷泉院女御超子—あの九八二年天元五年正月庚申の夜、脇息にもたれたままで、当時二才になったばかりのこの敦道親王らを残して頓死した兼家の愛娘——との間に生まれた第三皇子敦道親王(今時十三才)の御元服式が行われ、しかも寝殿(「小右記、日本紀略は西の対とする。西の対は枕・二六二段によると道隆の住んだ舎であつたらしい)では、道隆の三人の姫君達即ち、定子の次妹で、この二年後に、敦道親王の兄で後に三条帝となる居貞東宮(敦道と同母)女御となる淑景舎原子(この時十三、四才、大鏡没年記事と権記長保四年死、とから算出)、敦道親王の室となる三の君、この翌年九九四年二月には既に御匣殿になっている四の君(大日本史料正暦三年十二月七日の箇所に掲げた「伏見宮御記録一中に引用の「小右記」の記事に、「十二月七日丙寅、中宮還給内裏権大納言伊周、右衛門督^{摂政息}叙正三位、右中弁源扶義^義敘正四位下宮亮、近江守橘忠望^義敘正四位上^{造彼宮行事、云々無由}、左近少将隆家^子敘正五位下^{摂政、無位、藤原頼子}、^{叙正四位下、摂政とあり、これ}が或は四の君か、未考、後考をまつ。)

等の着裳式が挙行されて、実質はこのことを誠に驚くべき怪事だと評しております。(3)は、この着裳式の一ヶ月後に、次女原子が、明後日の賭弓を見るためか、或は女御として後宮に入るための下準備の為にか、とにかく入内された、と実質が言っているのでありま

す。(4)では、(3)において小右記が述べたように、二日後の廿九日に、賭弓の会が催されていることがわかります。この史料は、今迄とりあげて論じられた例を見ませんが、その内容からみて少なくとも、大系・全書両本の年表に「内宴」や「万燈会」を記載するくらいなら、同様に取り上げて着目されるべき記事であると考えます。

即ち(4)は、この記事からわかりますように、この当時十八才の中宮定子も、夫の一条帝や、父の摂政道隆、それに当時は二十八才で権大納言でしかなかった道長や、彼より八才年少なのに道長につづいて権大納言になっている二十才の伊周、伊周の伯父で道長や道隆の異母兄ゆえ、卅九才になるのに参議でしかない道綱、以下大勢の公卿殿上人等と共に、この南殿前の射場殿で行われた懸賞品つき競射大会を見物なさっており、しかも定子は懸賞品として、女装束を提供なさっていることがわかります。「権記」の二月廿八日の条によると、(4)の口、文にみるごとく一ヶ月の練習期間を置いて、この日の為に人選なされた前方の射手の筆頭者として、彼女や伊周の同母弟・若冠十五才の隆家が出場していることがわかり、同じく隆家と同じ前方射手の中には、母・高階貴子の兄弟で、積善寺供養の折には、余は満足と「こち空を仰ぎ胸をそら」し、又後年伊周・隆家流謫事件の折には、二条第に閉じ籠って定子等と共に泣いた伯父高階明順や信順、それに後方射手としては、同じく伯父の高階明理や道順、それに清少にとっても、最も関係の深い藤原実方や、二十才の藤原行成等の顔ぶれが揃っていたことがわかります。そうしてこの日の勝方は隆家らの前方でありました。定子ら一家は、この

競技を、きつと興奮裡に眺めたことでありましょう。そして、「小右記」の二日前の記事が取り消されてもいない所を見ると、定子と共に、里の東三条から来ていた、十三、四才の淑景舎原子も、父や兄や姉らと共にまた観覧したことを考えられます。もし、清少がこの春のしかも、酷寒の頃に宮仕えを初めていたものであるならば、初宮仕えの時からすでに、一七九段で自から言うごとく「あへなきまで御前ゆるされ」、局に帰る間もなく度々召されている彼女、又積善寺供養の日にも、わざ／＼見物し易いように、彼女よりもずっと身分の高い既に着席していた上臈、一人は定子の祖父兼家の同母弟の娘、もう一人は右大臣時平の孫娘で、宰相の君と呼ばれていたいわばお姫様方であるわけだが、この一人に「宰相は彼方に行きて、人共の居たる処にて見よ」と迄命じて、清少用に席を配慮してくれた定子、或は、淑景舎との会見日にも、彼女をまだはっきりと見たことがないと答えるや、さっそく自分の後から覗いてみるがよいと、同じく特別な配慮を与えるほどの定子なのであったから、この時も、侍女として列席させないというようなことはなかったでありましょうし、もし清少が列席していたならば、まだ見知らぬ「里人心地」の彼女が、今迄述べた詮子や中宮定子らが打ち揃って、宮中の内宴を承香殿へ出御されて見物なされた一月廿日頃の模様も、或は又、定子の御妹姫が一度に行なった三月下旬の着襲式に関する何らの記述も、或は、定子の父や兄や道長らが臨席し、定子の弟や彼女に近侍した四人の母方の伯父等に加うるに行成や実方や経房ら―特に実方などは、あの「小白河といふ所は」(三五段)やそれ

に、初冬出仕説に従うと、その初出仕をした月と見なされる十一月に行われたと考えられている(当段の史実年時に就ては未考、今は勘註に従う)豊明節会の文「宮の五節いださせ給ふに」中にさっき登場しだしているのを見る―これら人物が射手であった三月下旬の賭弓の宴についても、何一つ語り触れる所がなく、正暦四年中の、定子に関係ありと目される行事で、枕草子中に記述されているのは、この初冬の行事に位置する「宮の五節いださせ給ふに」(八六段)のみであること。加うるに、小右記々事(3)により、少なくとも賭弓日迄は三日間滞在し、更に例文(5)によれば、この賭弓の翌晩には、東三条南院摂政家即ち道隆の家が火事により「払地焼亡」してしまっているのですから、もし、淑景舎の滞在が賭弓の宴後も、たった一日でも延期していたとすれば、この火事に遭遇して、余計潜在期間が延びたこともあるかと推測できますし、こう言う風に淑景舎の滞在が長びけば長びくだけ、清少は淑景舎を拜見し得る機会があったことになるのでありますが、しかし、実際は、淑景舎を始めて見たのは、積善寺供養日の当日である、と百段「淑景舎東宮にまゐりたまふほどのこと」中でいっております。

この百段のくだりは、淑景舎が、居貞東宮(後の三条帝)妃として入内し、淑景舎に住み始めてから一ヶ月後に、同じく、後宮殿舎の一つである登花殿に住む姉・一条帝中宮定子を、そこに訪問会見した日のことを記述したものであります。淑景舎原子は、この時十四、五才、姉の定子は二十才(権記によると十九才)、この対面の時に来合わせた人物は、四十三才の関白道隆、道隆の妻貴子、あの

賭略のあった翌々年八月に、二十二才の若きで上席の大納言朝光や
 濟時や道長ら三人を飛び越え、権大納言から一挙に内大臣にまでな
 った伊周、伊周の異母兄で二十五才、権大納言の道頼、伊周の弟十
 七才三位中将隆家、道隆六男少将周頼、伊周の長男で三才になる幼
 い松君（道雅）、それに十六才になられる一条帝も加わつての、中
 関白一家が登花殿に勢揃いした団欒の一日だったわけで、定子は
 この会見の時わずか一月半後に道隆の死が訪ずれ、父の人を楽しく
 させる「さるがう言」をもらはやく事も出来なくなるなど、予測
 もしなかったことでありましょう。この夜定子が帝の夜のお召に昇
 殿する道すがら「殿のさるがふ言にいみじう笑ひて、ほとほとう
 ち橋よりも落ち」そうであつたと記しております。しかし、史実は
 このような草子中の記述とは異り、道隆は、既にこの一月ほど以前
 から、特に健康状態がすぐれず、正月二日の東三条院朝覲行幸にも
 又東宮と定子が行った二宮大饗にも、病のため不参加で、五日の
 叙位、十三日の縣召除目をも簾中で行っており、二月には、既に五
 日に関白を辞職する表を上表しており、彼女らとのこの会見のあと
 八日後にも、再び二度目の辞表提出を行っていることが諸記録によ
 ってわかります。とすると、道隆は、この時も決して健康状態のす
 ぐれた状態ではなかった、だからこそ、大げさにならないよう、曉
 方に、妻との同車で他の公卿達にも知れぬよう、こっそりとやって
 きたのでしょう。そうしますと、この段は、健康状態のすぐれぬこ
 とを自覚した道隆が、或はこれがひよっとすると定子らに会う最後
 になるかもしれないと云う一抹の恐れを内心に秘めながら、楽しい

冗談言を一日中言つて、娘達を喜ばせていたのかもしれないと云う
 ような、枕草子には表らわされていない面も考えられ、悲しい道隆
 の親心をこの文から窺えさえ出来てまいるのです。こういつた会見
 日の朝、髪などをお梳かせになり乍ら、「淑景舎は見たてまつりし
 や」と定子は清少に尋ねました。そうすると彼女は「まだいかで
 か。積善寺供養の日（朝日古典全書底本陽明文庫本は「御車よせの
 日」とある）たゞ御うしろばかりをなむ、はつかに」と答えたわけ
 です。この傍点箇所を、古典大系本は、「お見上げしたことがありま
 すか」と訳しております。この訳で、積善寺供養の日という本文を
 採用した場合は、何ら矛盾は出てまいりませんが、御車よせの日と
 いう本文を採用した場合、この訳では非常な内部矛盾を犯すことに
 なつてしまふでしょう。即ち、清少は例文(7)・(8)で見たように、淑
 景舎をその後姿や透影ばかりではあったが見たことがあるにも抱ら
 ず、定子に問われたとき、「どうしてお見申しあげることなどござ
 いましたでしょう。東宮様に御入内の日に御後姿だけを、それも
 はつかにお見申し上げただけでございます」と答えたことになる。
 一方定子だって、積善寺供養の日にわざ／＼席を拵らえてや／＼とく
 らいだし、清少の書いた積善寺供養日の文を読んでいたりしたら尚
 更のこと、三の君は二の君や四の君よりも大きい云々と語っている
 文を憶えているだろうから、今更「淑景舎をお見上げしたことがあ
 りますか」と問うのもびつたりこない。こう考えてくると、定子の
 上記質問を、双方に矛盾せぬ訳とするためには、過去「き」の解釈
 が問題で、「夜中ばかりにわたらせたまひしかば云々」にみるごと

く、淑景舎の登花殿への渡御は、昨夜の夜中ばかりの頃に終了して
いるのであるから、そのお出迎えの折にでも、「淑景舎を、もう見
申しあげましたか」と問うたのだと考えてみるのが適當でなかるう
か。だからこそ、清少は、「まだ、いかでか」と云うように答えて
いるのである。そうして陽明文庫本文を自己矛盾せず解釈するに
は、その後も「私が、最近淑景舎様を見申し上げたと言ふのは云
々」と云う風なことわり書きを附与せねば、意味の通りにくい文で
あり、この点陽明本文は採用しかねる。

尚、解釈上の問題点として、未定考のまゝになっている「三位の
君、宮の御裳をぬがせたまへ云々」(二六二段)の「三位の君」と
は誰かについても附言してみたい。岩波大系本でも、その頭註に
は、「三位の中將をさすか。但し、隆家がこの役に奉仕するのは不
審。能因本「三四君」、前田本「三君」とある。即ち、三位の君
を隆家だと考えるから、この時、弓箭を帶した男子に向つて中宮の
御裳をおぬがせ申しあげなさいと命じたことになるから、本文全体
がいかにも不審と言う考えが出て来るのである。その通りで、この
少し前文には「大納言二所(伊周と道頼のこと)三位の中將(隆家
のこと)は、陣に仕うまつり給へるまゝに、調度負ていつきづき
しう、をかしうておはす、殿上人、四位・五位こちたくうち連れ、
御供にさぶらひて並みたり」と明記されている通り、中宮の御座
所には居ない。今、御周圍に居るのは、「皆、御裳・御唐衣」を着
ておられるお姫様方(女兄弟ばかりでなく、近仕する身分の高いお
姫様上臈も含め)ばかりで、一番年少の四の君の御匣殿迄ちゃんと

正式の礼装をこらして控えている、その他には、殿の上(＝道隆の
北の方)だけで、北の方は、「裳の上に小桂をぞ着」た、略儀な私
的な礼装でおいでになっている。そこへ、道隆がきて「いやあ、お
姫様方、絵にかいたような御様子でいらっしゃいますな。それに、
今一人のお方も(常とは違ってめかしこまれ、今日は)人並みな御
様子にお見受けしますわい」と、例のさるがうごを言いながら、
貴子に向つて「三位の君、宮の御裳ぬがせ給へ」と言つたのであ
る。去る正暦元年十月五日に、従四位下女御だった定子が、先帝円
融帝の中宮であられた遵子を皇后という名称に変え、一条帝の中宮
におなりになったのであるが、そのあと同月二十六日には、今まで
従五位上であった高階貴子は、后母であるため、正三位に敍された
のであった。つまり、道隆が言つた「三位の君」とは、自分の妻で
かつ定子の生母である正三位高階貴子のことであり、そうすると続
く、「三位の君、御裳ぬがせたまへ、この中の主君には、我が君
(定子のこと)こそおはしませ、御棧敷の前に陣屋据ゑさせ給へ
る、おぼろげのことかは」の文が、何ら無理なく、しかも傍点の部
分が生きて、「この中の主人は私じゃない、我々の娘定子こそ、主
君でいらっしゃるのだ」と面白く解釈出来てくるわけである。諸本
に、この箇所の変同あるのは、この道隆の妻は、常に「うへ」とか
「殿のうへ」と清少によつてよばれているため、及び、三位になつ
ていることに気づかなかつたために起因するであろう。尚、この箇
所は、能因本の「三・四の君」や前田本の「三君」よりも、岩瀬本
々文によつた方が適當であろう。後年の道長が言つた「宮の御てて

にて、まろわろからず、まろが娘にて宮わろからず「云々」の言を運想させるような道隆の言葉ではありませんか。これに続く「陣屋据ゑさせ給へる云々」の部分訳も、「近衛の陣屋を設けておられるとは、並大抵のことか。」(大系本頭注、金子元臣枕草子評釈及び池田亀鑑全講枕草子とも同文。)との訳出では未だ意を尽し得ず、「中宮様の御棧敷の前に、近衛の陣屋を附設させてお出でになられるなど、余人に許されることでありましょうか。君寵の並大抵でないことが拝され、ほんとうにありがたいことです」等、これは試解に過ぎませんが、心情の何辺にあるかわかるような解釈が望まれます。

さて、話を初宮仕え年時の推定にもどしてみましょう。前掲例文(9)・(10)・(11)の四つの文を読んだの共通した性質は、まだ今参りから間もないことを想わせるような表現の仕方、自己が今参り(新参者)であるが故に、以下の文に記されたような事態が起ったのであることを語ろうとする心の動き、が見えることである。即ち例文(9)は、定子の生母がこちらにお見えになられたのに、清女も今参り故、余計見たいと思う心が強いに拘らず、几帳を引き寄せて了われ、新参者達の前には姿をお見せにならない、今参り故期待を外された憂鬱さをのべた文であり、例文(10)は、今参り故、後の清少の態度とはまるっきり違って、到着の遅れた理由の弁解を控えている様子、及びその清少の心を吸んで他の女房が代弁をし、更に定子返も、今参りでない人がもっと気をつけてやるべき事だと、古参の女房に注告をする件りで、暗に清少の今参りであるが故にとらねばならなかった態度を、よく察しいたわりをかけている点が覗える。(11)

は、清少の今参り者の初心さ故に抱いた、新鮮で強烈な感激―それを他人に分与したい心―あの初宮仕え一七九段中の「……かぎりなくめでたしと、見知らぬ里人ごこちには、かかる人こそは世におはしましければと、おどろかるまでぞ見まゐらす。」というのと、非常に似た感懐の持ち方である。(12)は、道隆のお住みになっておられる西の対の御殿の唐廂に、車をさし寄せられて、そこから各自が乗車することになったので、全員渡り廊下にぞろ／＼と出かけて行くのだが、古参の者はすっかり慣れ切った様子で遠慮もなく話などかわしたら先に立って歩いて行くのに、新参の者は気がひけで、遠慮しつつ人の後から従いてゆく、そして、心中では、行く手の御殿の御簾の中に中宮様や淑景舍様以下が立ち並んでいられることに恐れをなし、ことに「そこらの御目どもの中に宮の御前(中宮定子)の見苦しと御覧せん限りさらにわびしきことなし」と、自分の容貌全体を距離をもって眺められることに、得もいわれぬ恥しさを感じ、弱りきっているのである。さて、先に進む前に、以上の例文から得たことを、一まずまとめてみますと、次のようになります。

一、正暦四年初春の出仕説とすれば、同四年一月―三月迄の間(例文(1)―(4))で、定子に何らかの関係があった、それ故清少の関与も十分考え得るような宮中行事や事件を史実によって拾い上げてみたのだったが、何らそれらに就ての記述が認め得られないこと。

二、淑景舍の著装(註⁽⁵⁾・14才カ) (九九三) 正暦四年二月廿二日
淑景舍臨時の入内 (九九三) 正暦四年三月廿七日

道隆の積善寺供養列席

(九九四) 正曆五年二月廿日

（廿日に到る迄の定子二条第滞在期間は、本文に従うと約十九日間となる）

淑景舎東宮居貞へ参る

(九九五) 長徳元年正月十九日

姉・中宮定子と会見

(九九五) 長徳元年二月

そうして第一類本中の陽明文庫本文のみを例外として、
あと第一類本、第二類本を問わず、共通の本文によれば、清
少が、淑景舎を見たのは、積善寺供養日の折、「御うしろば
かり、はつかに」見たにすぎないといっていること。陽明文
庫本文によると、積善寺供養の折に見ているにもかかわら
ず、東宮への入内日に後姿をみると、一そう淑景舎をみた時
期が下ってしまふ。(私註、清少の後姿だけだというのをそ
の通りに受けとると、例文(6)・(7)・(4)中で淑景舎らを見てい
る箇所も大体後姿ばかりで、(4)は簾中からこちらをみている
のがわかっただけでどれも、はっきりとみつめたことはなか
ったわけであると解しておいてよからう。)

三、定子之二条宮への遷御は、この時が始めてではなく、「日本

紀略」や「百練抄」によると、

正暦三年の十一月二七日から翌月十二月七日迄、即ち、この清少も伴われた積善寺供養日よりも、一年数カ月前に、既に新造二条宮へ出向き、約十日滞在されているのであるが、二日段文中には以前に二条宮に來たことがあるような描写の所が一つもない。

四、数々の記録類（1 本朝世紀、2 百練抄、3 日本紀略、4 扶桑

略記、5 本朝文粹、6 門葉記）に書き留められ、その年月日
まで明瞭に記録されている積善寺供養の記述が、一七九段の
初宮仕立の頃の清少と定子の心理と、非常によく似ているこ
と。⁽¹⁾ われをば思ふ^(二七九) われをばいかに^(二八二) 思ふべしや^(二八七)
と九七段の一連の文通は、^(二八七) われをばいかに^(二八二) 思ふべしや^(二七九)

召や、の連の共通な定子のよびかにも、この宣仕え間もない頃、の同一気分、の連続の時期の一日とみてよいのではなからうかと思われるし、先きの例文中、未だ言い及んでいない(13)・(15)・(17)の文とこれから吟味する一七九段に於て、わずか一段の文中で、①定子や定子の父道隆、定子の兄弟伊周や隆家らに自分の容貌を極度に見られまいと恥じる初心な清少の姿が描かれておりますが、②この段よりは後の、正暦五年(九九四)の夏の日を描いた二九五段(＝三二三)には、既に伊周へのそのような極端な羞恥心はなくなっており、かなり慣れてきている態度で伊周と話をかわしたり、夜の御殿から退出する時、伊周に送っていたゞいたりしている。③先に(9)・(10)・(12)・(13)の例文でみたように、二六二段中には、「まだ初々しきほどなる今参りのほど」以下三箇所に迄、清少は自ら、今参りでまだ間もないことを語っております。

以上のような諸点を総合的に考へて、清少の初宮仕えは、正暦四年初春説と初冬説とのいづれかとすれば、私は、四年の初冬の方を考へた方が妥当性があると思ふのであります。

以上、長くなってしまいましたが、一応、正暦四年初冬初宮仕えという視点に立った上で、これから、一七九段・二六二段・九七段

を考えてまいりましょう。

さて皆様に御注意いたゞきたいのは、先の初宮仕え年時考察の折も少々触れましたのですが、この九七段の定子の清少に向つて発された、「思ふべしや否や」と同類の質問が、今見てきました所の、二六二段中と、一七九段の初宮仕えの段中にも存在しているということです。初宮仕えの時期を正暦四年初冬と設定いたしますと、二六二段積善寺供養日は、それから約四ヶ月後の出来事を叙した文であります。この正暦四年初冬（九九三）——同五年二月廿日という一筋の起・着点に、「我をば思ふや」——「我をばいかゞ見る」という定子の言葉が表われています。そうして九七段に於ては、今度は「思ふべきや否や」と云う定子の言葉が見られるわけです。この九七段の定子の言葉が、先の二段との關係に於てどの辺に位置づけさせたらよいか、九七段の記述内容の年時を考える時、この一七九段と二六二段とを結ぶ言葉は、参考にする価値があると思われるま

す。

一七九段に浮び出ている清少の自画像は、後になってからは、堂々と貴公子や殿上人、或は定子とも受け答えしている宮仕えに慣れ切った頃の彼女からは、全く予想外な、純情な清少の姿が映し出されていて、彼女の奥深くに秘められていた一自画像——人間的な面が生々としており、この段を読むことによって、読者が今迄清少という女性に感じていた潜入感を減殺することにもなろうか、と思われ

るほどの好文です。

「宮にはじめてまゐりたるころ、もののはづかしきことの数知

らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、絵など取りいでて見せさせ給ふを、手にてもえさし出づまじう、わりなし。」

「高杯にまゐらせたる御殿油なれば（＝高杯を逆に返してその底に燈明皿をおいて油を入れたので、低く、それだけ近々と置かれた燈火だったから）、髪筋などもなかなか昼よりも顕証に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなれば、さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるはかぎりなくめでたしと、見知らぬ里人ごちには、かかる人こそ世におはしましけれと、おどろかるるまでぞまもりまいらす。」

低い高杯に移された燈火の下に、髪の毛筋などが昼間よりも、一本一本、はっきりと見えるので、目のくらみそうなまばゆさを感じのだが、そこをぐっと堪えて拝見すると、大そう冷たい頃のこととて、さし出しなされた袖口から、中宮様のお手がわづかにお見えになっているが、そのお指が匂おうような薄い紅梅なので、「何とまあ素晴らしいことか。」未だ宮中に上ったことのなかった里人心には、「こんな素晴らしい人が、世の中にはおいでになるものなんだなあ」と目の覚めるような思いで、中宮様をじっと見守るのでありました。そうこうする中に、夜も次第に明け初めて来しました。と彼女は途端に、あの醜い容貌を恥じて、夜中に久米路に橋をかけたと言ふ伝説の一言命さながら、定子に顔——それほどきれいでなく、昨夜来の御前伺候で疲れもし、剥けてきてもいるであろう顔——を見

せまいと気が気でなく、局に逃げ帰ってしまいます。女官どもが「早くこの格子を開けよ」と命ずる声を耳にしながらも執拗に俯伏し続けていたのに、さっそく戸を開け散らして、ほっと一息ついて、戸外の積る雪に見入る彼女。が、一息入れるか入れぬ間に、もうお呼び出しがかり、それも再三再四あるので、この局の主（あるじ。清少は古参の女房の許で行儀見習い中だった。往時も、他人の部屋にともに起居しては指図をうける習わしがあったのです）も、「見苦し。さのみやはこもりたらむとする。あへなきまで、お前ゆるされたるは、さおぼしめすやうこそあらめ。思ふにたがふは、にくきものぞ」（「見苦しいですよ。そんな風にこもってばかりいようとするのは仲々に許され難い御前伺候を、こうあつけないまでにお許しにされたというのも、それ程あなたをお氣に入ったからでこそあります。御好意にさからうことは、憎らしいことです。さあ、早く、早く」と、たゞ急がしに急がすので、どうしてよいやらわからない心地だが、とにかく再び参上する。こんな清少の目には、反対に、古参のゆったりと落ちていて長く火鉢に手をかざし乍ら隙なく居並んでいる人々、或は、お手紙の取り次ぎに立ったり坐ったりしながら、何やら言つては声を出して笑っている人々の姿の、いかにも遠慮なげであることが、実に羨やましく、一体何時になると自分も、「さやうにまじらひならむと思ふさへぞつつましき」と嘆息されるのであった。

この日は、定子の兄の伊周と、続いて弟の隆家までもやって来られた。すると清少は、

(19)

「いかでおりなむと思へど、さらにえふとも身じろかねば、いますこし奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳のほころびよりはつかに見入れたり」（以下一七九段より抜萃）

(20)

「大納言の……御直衣、指貫の紫……雪に映えていみじうをかし。「……物忌に侍りつれど、雪のいたく降り侍りつればおぼつかさになむ」^{中書}『道もなし』と思ひつるに、いかで（どんなにしてこられましたの）とぞ御答へある。うち笑ひたまひて『あはれと』もや（私がきたことを）御覧ずると（思つて）などのたまふ（お兄妹の）御ありさまども、これよりなにごとかはまさらむ。物語にいみじう口にまかせて言ひたるに違わざめりとおぼゆ」

(21)

「御帳のうしろなるはたれそ」……などのたまふに……よそに見やりてまゐりつるだにはづかしかりつるに（几帳ごしに）さし向かひきこえたるこちうつともおぼえず。行幸など見るをり、車のかたにいささかも見おこせたまへば、下簾引きふたぎて、透影もやと扇をさしかくす（程であるの）に、（今こう向き合つて坐られては）、なほいとわが心ながら、おほけなく（「自分ながら厚かましく）、いかで立ちいでにしかと汗あえていみじき」

(22)

「顔をかくすために）ささげたる扇をさへ（伊周が）取りたまへるに、振りかくべき髪のおほえさへあやしからむと思ふに、すべてさるけしき（そう思う内心）もこそは（伊周に）見ゆらめ、（わかつてしまったことだらう）。……（肩の

代りに今度は顔に)袖をおしあててうつぶしゐたる云々」

(23) 「一ところ(でさへ、困惑しきっていた)ところだにあるに、……おなじ直衣の人(隆家)まゐりたまひて……殿上のうへ(噂話)など申したまふを(定子の傍でともに)聞くは、なほ変化のもの、天人などの下り来るにやと、おぼえしをさぶらひ馴れ、日ごろ過ぐれば、いとさしもあらぬわざにこそはありけれ。」

等々の羞恥感や感激に捉らわれてしまふのであった。この(19)・(20)・(21)・(22)・(23)という例文の中には、二六二段中よりの戯粋例文(14)・(15)・(17)・(18)と読みあわせると、どんなに彼等に対してこの二つの段の時は、我が容貌を恥じ、顔を見られる事を極端におそれ、伊周や隆家や定子らを讃美する気持の強かったことか、知りすぎるほど知ることができましよう。

そうして、この文の次に、定子の清少に対する「我をば思うや」との質問が発せられているのです。

「ものなどおほせられて、宮『われをば思ふや』と問はせ給ふ。」そこで清少は、「『いかがは』『どうして中宮様をお思い(愛し)申し上げないようなことがございましょう。もうく、心の底からお思い申し上げております』と申しあげた時、台盤所(女房の詰所)の方で、「くしゃん」と誰か大きいくしゃみを放ったので、定子は「あな、心憂。そら言をいふなりけり。よしよし。(あゝ、心憂いこと。あなたは嘘を言ったのですわね。いいわ、いいわよ。)」といって奥に入ってしまったというのです。日頃、定子をお思い

している心を何とか訴えたいと希求していた清少に、この問いは絶好のチャンスだったが、いらざるくしゃみの邪魔だてで、嘘をついたように「わざとであるにしろ思われてしまつて実に心外で、腹が立つ。私じゃなく、「鼻の方こそ、そら言をしたりと思ふ。」「大体、私は、常日頃から、くしゃみは、氣にくわないものと思うので、出なかった時でさえ、堪えるようにしているくらいなのに、こんな大事な折に、人からされるなんて、なんて憎らしい」と思つたけれど「まだうひうひしければ、ともかくも啓しかへさで」局に帰つてきた。とそこへ、浅緑の薄手の鳥の子紙に書かれた優雅な文(「艶なる文」というのを「意味深そうな手紙」「大系本」と註しているが、かく書き直さねばならないほどの理由も、歌の内容を考へてもなさそうに思う)が届けられた。あけてみると「いかにしていかにしらまし偽りを空にただすの神なかりせば。」(どうしてどのようにして貴女の言葉の真偽を糺すことができましようか、もし偽りを糺す、糺す神(賀茂神社の神)が空においでにならなかつたならば)とあるので、清少が「うすき濃さそれにもよらぬはなゆゑに憂き身のほどを見るぞわびしき。」式の神もおのづから。いとかしこし。(薄く濃くとりどりに美しい紅梅の花、ならぬ鼻くしゃみのおかげで、嘘をついたなど、おっしゃられ、つらい目を見たことが佯びしゅうございます。人の善悪を監視するという式の神も、そのうち自づとおわかり下さることでございましょう。わざくお文を賜りもったいないかぎりでございます。)と返事をさし上げた。

定子の「我をば思ふや」という問いに対する清少の答は、他人に大くしゃみを放たれた為に、けちがついて、大失敗に終るといふ可笑しな場面があったのであり、だから、反対に、いつか必ず挽回したいと彼女は思ったにちがひありません。

このような、期せずして起ってしまったユーモラスな失敗の一日から、一・二ヶ月経って、積善寺供養の日がやってきました。枕草子中からは、何ら窺えませんが、この日、関白道隆の御願寺である積善寺しやくぜんじに集った人々の顔ぶれを、本朝世紀から拾って眺めてみますと次のようでありました。

故円融帝女御で一条帝の生母であり、一条帝即位と共に皇太后の位につかれた卅三才の詮子、一条帝中宮定子、「為尊親王、敦道親王、右大臣、内大臣、大納言朝光、同濟時、権大納言道長、中納言顯光、同懷忠、同時光、同実資、参議平惟仲、公任、誠信、弁・少納言、外記、史皆参、自余四位五位不可勝計」とあり、これに加うるに関白道隆、権大納言伊周、伊周の異母兄中納言道頼等と、中納言・参議で数名を除き、殆ど当時の公卿・上達人の顔揃れが宮廷外に出揃った盛儀でありました。二六二段の文によると、女院側の車は唐車以下十五台、中宮側は、定子の乗った葱花輦れんの外に二十台合計一輦三十五台という女車の数でありました。まず女院の御車に付き添って、多数の公卿以下人々が供奉し、次で一番後から出御した葱花輦が、二条大路に体列を整えて待機する車列前を通過するのをまわって、これら女房達の車は一斉に櫓をあげ、みどりに霞むうららかな朝の中を、積善寺に向けて出発したのでした。そうし

て女院がまず辰の一刻、午前八時頃に先着なさったあと、順次に女房達の車は、「高麗・唐土の樂して、獅子・狛犬こまいぬをどり舞ひ、乱声じようしやうの音」の響きにものもおぼえぬくらいに興奮する清少をものせて大門を通過して行きました。

清少が棧敷へ参上すると、定子は未だ、御裳や唐衣を着た姿のまゝで待つてくれています。「くれないの御衣でもよろしからんやは。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染えびぞめの五重がさねの織物に赤色の唐の御衣、地摺りちずりの唐の薄物に、象眼重ぞうがんねたる御裳などを奉りて、ものの色などは、さらになべてのには似るべきやうもなし」といった目も緩な姿で清少の御前に立たれて、そうしてこの時「我をばいかが見る」(私をどう感じますか)と、お問いになったのでした。この時清少は、「大麥御立派でいらっしゃいます」など、お答え申しはしたものの、「言に出では世のつねにのみこそ」と書き留めております。この積善寺供養日の定子の問いは、清少の初宮仕えの頃、くしゃみをされたことのある日から、多分一、二ヶ月内のことでしょう。

さて、次に年時の不明な九七段の言葉が見直されてまいります。ここには、「御方々、君たち、上人など、御前にいとおほく」伺候している中で、廂の柱に凭りかゝって、他の女房と物語りなどしている清少、或は「御前にて物語りなどするついでにも」、同じ思われるのなら、第一番でないとなんになりましようかなど、意見を述べ始め、物慣れてきた清少の姿が見うけられます。あの「いつの世にか、さやうに交らひならんと思ふさへぞつつましき」と述べし

ていた本人が、今は他の女房と屈託なきように話を始め、「絵に書きたるをこそかかるとは見しに、うつつにはまだ知らぬを夢のこちぞする」と見申し上げた、当の定子の御前で物語り等をして、序に、人から思われるのなら第一番でないかと、二番や三番では死んでも嫌だなど、持前の気性を表わし始めてきておりますし、「いかで下りなむと思へど、さらにえふとも」身じろぎさえ出来なかつた彼女が、廂の柱に凭れてくつろいだ姿をみせております。それに、彼女が定子の御前で、第一番に思われていたなどと、傲顔とも言える放言をしている所から、清少が切に、定子に一番に思われたいと希っている心、及びその希望が可能な状態であることを暗示しているようでありますし、定子の方も、「第一の人に又一に思はれむ」と思へと清少を励ましている言葉の裡に、暗に清少を第一に思召されているらしい趣きを推察できます。定子と清少は、意心伝心とでもいおうか、お互いに最初の対面の時から心の通じるものがあったのです。他の中宮様と侍女との間では持てなかつたような。注目すべきは、春三月、積善寺供養から一ヶ月程経過後、清少が物忌みの為に宮中から多分初外出した頃の文と目される「三月ばかり物忌しに」(二八四段二三〇一段)の記事です。宮中退出した二日目というに、中宮定子から清少へ「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮しわづらふ昨日今日かな」(あなたが未だ私の許に出仕してなぞいなかた今迄をば、一体どのようにして過ごしてきたのですようか、お前が退出してからというものの長い春の一日を退屈でもてわづらっている昨日今日です)という歌を、宰相の君の「(あなた

の居ない)今日しも千年の心ちするを眺だにとく(お帰りになって下さい)」との言葉も添えて贈られて参りました。この歌からも、清少は三月頃、もう中宮にどのように深く思われていたかを知ることが出来ましょう。このようなありがたい主人の歌に対して、清少の返歌は「雲の上に暮らしかねける春の日を所がらともながめつるかな」と、宮中で退屈で暮らしかねたと云う程の長い春日を、私は又場所柄のせいだと思つていたと言う内容のもので、右の定子の言葉にもう一つ迎合的ではない歌でしたから、参上した所、「昨日の返し、暮しかねける、いとにくし。」と皆が清少の返歌を憎んだことだった旨、定子から話し聞かされています。このような清少の返歌の仕方からも、宮仕えに慣れ出している彼女を見ることができまうし、この二八四段よりも数週間位後の一日を描いた二一段(二五段)「清涼殿の丑寅の隅云々」に始まる、一条帝と定子の幸福な「千年もあらまほしき」状態を「年ふれば齢は老いぬしかはあれど君をし見れば物思いもなし」と即詠して御意を得たという段でも、「よそに見やりてまゐりつるだにはづかしかりつるにいとあさましう、さし向かひきこえたるこちうつつともおぼえず……いささかも見おこせたまへば、下簾引きふたぎで、透影もやと扇をさしかくすに……いかで立ち出でにしかと汗あえていみじ」と思われた伊周、女房どもが冗談を言う伊周に対して「いささかもはづかしとも思ひたらず聞え返し、そら言などのたまふは、……目もあやにあさましきまであいなう」、傍で聞くだけで面を赤らむと言っていた伊周、恥しきで身動きも出来ず、几帳に隠れ、扇で顔をかくし、扇

を取られると袖で顔を覆って俯伏するといった具合だった伊周と言葉を交わしています。それに、その後の、伊周が大納言と呼ばれている所から、彼が大納言在任中の事、即ち同年の八月廿八日に二十才で八才上で上席にいた伯父の道長を飛び越えて内大臣になる迄の夏の出来事と目される二九五段（＝三二三段）「大納言まゐり給ひて」の中では、若き伊周が、十五才になる一条帝に、家庭教師よろしく漢詩文などの話をし始め、例によって明け方の三時半頃に迄及び出す、一条帝は柱に凭れて、こっくり／＼と居眠りを始める、そんな頃迄、定子に伺候し、定子と共に側で聞き入る清少の姿があり、その翌晩は、清涼殿の夜の御殿に入られる定子を送つての帰り道、伊周が彼女の袖を捉えて、「倒れるな」と介添え送ってきてくれるのを、自然にうけて、「遊子なは残りの月に行く」と曉の賦を吟ずる伊周の優美さを、やや客観的な態度で点描している清少を見うけるに至っています。

定子が清少に言った「思うべしや否や」（あなたを愛した方がいいのですか。愛しなくてもよいのですか）などと言うような内容の言葉、反対に清少も定子の前で「すべて人に一に思はれずば何にかはせん」と言うようなことを言い合ったりすることが、各々自分が相手の心の中に占める位置の、はっきりと固定しきつた或平衡状態を見つけ出して了っているような時とか、質問し答えることが、あまり自明のこととなり効果の出ないような期間を経てからでは、日常の場で今更言い交わしにくからう。そこで、この九二段は、あのかくしゃみという邪魔が入って、腹の立つた時のことが、連想的に魅

み返ってくるような或時期、定子が、一連の同じような言葉を清少に對して言ったような時期からあまり遠くなく、清少に定子があえて「あなたを愛すべきですか否か」の答えをいわせてみようと思つた頃、そして清少の宮仕えに先述の如く物慣れた頃、しかも定子の御前に事もなげに、御かたがたや貴公子や殿上人がつめかけており、そしてそんな中で右のようなやりとりが二人の間で出来、清少が定子の現状を蓮上の極楽浄土に喩え、又、定子が清少に「第一の人に、第一番に思われようとなさい」との自負ある表現を、全く自然に伺候する人々の中で口にはせることが出来た頃——正暦五年の前半期、少なくとも初宮仕えの頃から一年を経るか経ないかの頃の或日の風景としておきたいと思います。

この今迄述べてまいりました諸段「宮に初めてまゐりたる頃」・「積善寺供養」・「三月ばかり物忌しに」・「清涼殿の丑寅の隅」・「大納言参り給ひて」等の描かれた西歴九九四年、正暦五年という年は、歴史的に見ますと、前年から引き続き、また翌年にも持ち越す大疫癘流行の大へんな年でありました。「本朝世紀」五月十日の文によりますと、この日太宰府より言上の解文中の一枚には、去年正暦四年中の「冬以後于今日、疫癘已発、府中不静、……人民皆欲天亡、而其災弥倍、病患未止、遠近路辺、死人滿塞」とのせ、九州より端を発したらしい疫病は、京にも蔓延し「自去四月至七月、京都死者過半、五位以上六十七人、今年自正月至十二月、天下疫癘最盛、起自鎮西、遍滿七道」（日本紀略）、其の他、「本朝世紀」・扶桑略記」・「百練抄」も同種の記事をのすし、道路には死骸

満ちあふれ、京中路頭の病人を収容したり、京中の河川の死人を掃
 掻することを看督長（かどのおき）指揮の下に行ったり、諸国に臨
 時の仁王会を命じたり、京中のありとあらゆる神社に奉幣したり、
 大極殿で御読経を行ったり、大般若經を転読させたり、宮中あげて
 の騒ぎであつたし、翌正暦六年二月廿二日、即ち淑景舎と会見のあ
 った数日後には、縁起直しのために正暦を長徳と改元したりしてお
 ります。そしてこの長徳元年の四月には、道隆も、その年に死んだ
 多くの公卿達の一人として死んでしまうわけです。尤も道隆の死
 は、この流行した疫病の為ではなく、飲酒の過ぎたことによるのだ
 と記るされておる所をみますと、或は肝硬変などによるのかとも考
 えられますが、道隆の健康に関するような記事を、記録によつて拾
 つてゆきますと、まずこの疫病の猛威をふるつた正暦五年の十月二
 日、東三条院で逆修法会を営んでおり、十三日には道隆が病む事あ
 りと始めて記るされた記事が目につきます。そうして翌長徳元年の
 正月二日の東三条院への朝覲行幸にも所労のため供奉出来得なかつ
 たこと、正月五日の叙位、十一日の除目始にも病のために、道隆は
 簾中でこれを行っていること、同じく九日には、彼ではないが伊周
 の二条第が火事で焼亡している、そうして十九日には例の淑景舎原
 子の東宮への入内が行われ、翌二月五日には病による関白辞職の第
 一回上表が行われ、同二十六日には、同第二回目の上表が行われて
 おり、三月五日からは、病の道隆に代つて、道隆自身でさえ権大納
 言になったのは三十四才の時であつたのに、二十二才になつたばか
 りの嗣子伊周に、後継者として文書を内覧せしめるという役目を譲

り、翌四月十日に死んでいるのをみるのであります。こうして見て
 まいますと、一見、草子が、このようなあわただしい雰囲気とい
 うものは、枕草子中の前述の記事などからは、全く窺うことができ
 ません。今迄述べた諸段以外の五年中の記事と目される「上の御局
 の御簾の前にて（九〇段Ⅱ九四段）、「御仏名のまたの日」（七七段
 Ⅱ八一一段）、なども、皆楽しい世の憂さとは隔絶した世界を点描し
 ており、清少の仕えた定子中宮はこの九七段で清少をしていわしめ
 た如く、極楽浄土にも似た別天地に、十五才の早春に入内して以
 来、二十才の春迄住み慣れていたわけでした、枕草子の此等諸段
 は、その後父の死によつて一挙に暗転しはじめる後半の、辛らく悲
 しい生涯の諸段と対峙して鑑賞することによって、味わいを深める
 ことが出来ましょう。

註(1)

在阪大学国文学教官によつて組織され、契沖ゆかりの地、
 円珠庵にて、約十八年間前に開講されてより現在に至る迄
 継続している講座。現在は月2回日曜日には「源氏物語」
 が、土曜日には「枕草子」講座が開られており、一カ月
 毎に別人の講師がうけもっている。

註(2)

段数明示は、朝日古典全書本の段数により、（Ⅱ）に古
 典大系本の段数をも示めた。

註(3)

行成の出る段Ⅱ「上にさぶらう御猫は」・「職の御曹司の
 西おもて」・「頭の弁の御許より」・「頭の弁の職に」以

上五回、実方Ⅱ「小白河といふ所は」・「宮の五節いだし
せ給ふ」・「なほ世にめでたきもの」以上三回、経房Ⅱ
「御仏名の又の日」・「里にまかでたるに」・「頭の弁の
職に」・「殿などのおはしまさで後」・「左中将まだ伊勢
の守」（跋文）以上五回

註(4)

（道勝）
入らせ給ひて見たてまつらせ給ふに、みな御裳・御唐衣・
御匣殿までに着給へり。殿の上は裳の上に小桂をぞ着給へ
る。「絵に

註(5)

淑景舎の年令算出は大鏡に「父殿うせ給ひにし後、御年
廿二、三ばかりにて失せさせ給ひにき」と権記、長保四年
八月三日に頓滅したと言う記事との組み合わせによつた。

（道勝）
入らせ給ひて見たてまつらせ給ふに、みな御裳・御唐衣・
御匣殿までに着給へり。殿の上は裳の上に小桂をぞ着給へ
る。「絵に

（道勝）
入らせ給ひて見たてまつらせ給ふに、みな御裳・御唐衣・
御匣殿までに着給へり。殿の上は裳の上に小桂をぞ着給へ
る。「絵に